

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 小川直之編 『民俗学からみる列島文化』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高見, 寛孝, Takami, Hirotaka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000392">https://doi.org/10.57529/0002000392</a>

紹介

小川直之編

『民俗学からみる列島文化』

高見寛孝

本書は、編者の小川直之國學院大學大学院客員教授（以下、編者）の薫陶を受けた若手民俗学徒たちが、「いくつもの日本」を主題として研究した成果を集めたものである。

編者も指摘しているように、最近の日本民俗学では特定地域のみを対象とした研究が多く、「日本」を問う研究は少なくなっている。その原因のひとつは文化人類学における機能<sup>11</sup>構造主義の影響であろう。だがそれでは、ルース・ベネディクトがマリノウスキーを批判した（『文化の型』八七～八八頁）ように、国と地域との関係が理解できないだけでなく、柳田國男が掲げた「憂国の学問」としての性格も失われ、日本民俗学自体が隣接諸科学の中に埋没してしまう。編者が民俗学の特徴として「日本列島全体を俯瞰するような文化研究」を挙げているのはそのことに対する憂慮の表れと思われる。

全体構成は、編者の「列島文化をどう考えるかー民俗学から

の文化領域論」を総説として巻頭に置き、以下「Ⅰ 年中行事」、「Ⅱ 酒と食」、「Ⅲ 死と死者」、「Ⅳ 動物との交渉」の四部から成る。九人の執筆者がそれぞれに、天道花・地藏祭り・神酒口・葉包み食・魂呼び・流れ仏・憑物・鳥勸請・鶏の予知など様々なテーマを取り扱っているが、いずれも日本列島を歴史的並びに地理的に俯瞰する視座からの研究である。その結果として「いくつもの日本」が浮き彫りにされている。

「いくつもの日本」には、異文化系統論に依拠した研究と地域性論の立場からの研究とがある。前者は日本をアジア各国との歴史交流の中に位置付けようとする立場である。列島文化をアイヌ文化／ヤマト文化／琉球・沖縄文化（本書十九頁）の三領域に区分する場合もこれに含まれよう。中国や韓国の事例を取り扱っている鶏橋晴菜の論稿や、沖縄の事例を含む宿澤泉帆および鈴木慶一の論稿はこの立場から日本文化を捉えようとしているのであろう。一方で後者は、地域文化をそれぞれに独自性を有する文化として捉える。日本社会を都市（中央）対田舎（地方）の対立関係や主従関係に位置付けられない立場である。両者に優劣の差はない。日本の未来をどのような社会として創造するのかに係っている。

いずれにしろ日本民俗学による「いくつもの日本」研究は大

きな可能性を秘めており、日本の未来に多大な貢献をもたらすであろう。九人の今後の更なる研究に注目したいし、民俗学研究を目指す若い人々が彼らに続くことを期待させてくれる書である。

(A5判、二七二頁、アーツアンドクラフツ、二〇二三年一月発行、三二〇〇円＋税)